



在澳シールポルト氏贈付書類内
 英佛獨府縣稅
 第一號
 (即チ地方收稅ニ關スル報告書第一号)



2987



英佛獨府縣稅

英國

元來英國ノ府縣稅ハ其時々需求ニ應シテ徵收スル規則ニテ每
事務皆各其稅ヲ異ニシ一務必ス一稅ヲ附シ之ガ費用ニ供セシ
ガ縣務漸々其範圍ヲ加ルニ隨ヒ一務必一稅ノ法勢遂ニ行ハレ難
ク彼是相流用スルヲ以テ稅法亦煩雜トナレリ
英國ノ學者ハ府縣稅ノ類ヲ分テ二トナシ(甲)ヲ合儀セル縣ニ於
テ徵收スル稅ト稱シ(乙)ヲ合儀セザル縣ノ稅ト稱ス乙ノ縣稅中
最要ノモノハ次ノ如シ

- 第一 教育稅 (英語) フアト、レイト
- 第二 道路稅 (全) ハイウェイ、レイト
- 第三 衛生經費ノ稅 (全) レビテラ、レイト、デストリクト
- 第四 社寺稅 (全) チヨ、レイト、レイト

大正十一年四月
大隈侯爵郵寄

讀全濟

此ノ他尚ホ諸種ノ雜稅アレドモ今畧シテ載セス
教育稅ハ元來特ニ窮民教育ノ費用ニシテ供セシガ當今ニ在テハ
之ヲ以テ經費ニ充ツル所ノ事務凡ク三十種ニ下ラス該稅ハ實
ニ英國府縣稅ノ殆ド全額ニ充ルト謂フベシ教育規則第二編第
一條ニ拠レバ凡ク都邑ノ住民土地家屋ヲ所有スル者或ハ之ヲ賃
ス者及石炭鑛又ハ薪用森林ノ所有主ハ各若干ノ稅ヲ出シ窮民
ヲシテ工業ニ就カシメ或ハ扶助金ヲ與ヘ幼少ノ者ハ工業ヲ學
ハシムル等ノ經費ニ充ツベシトス是ノ如ク收ムル所ノ稅ハ一
社區（ハリシ）ノ費用ニ供スルモノニシテ以上謂フ所ノ諸不動
產ノ所有主カ又ハ借用人ノ中現在之ヲ利用スル者ヨリ納附シ
而其稅價ハ該產每歲ノ賃價例ハバ所有主自ラ之ヲ利用スル片
價ニ拠テ稅
價ヲ定ムニ拠テ定ム故ニ教育稅ハ之ヲ利用スル所有主ヨリ
視ル片ハ地稅或ハ家稅ノ如ク借用人ヨリ視ル片ハ又借用稅ノ

如シ

稅價ハ所有物ノ正納ヨリ算出ス即チ其收獲全額ヨリ國費稅諸
公費修復料及諸証賦金等ヲ引去リ復其殘額中ニ就テ需求費用
例ハ生活ヲ除キ餘ヲ稅額トナスナリ免稅ハ勿論行フコトナク
各民負債ノ有無多少モ亦敢テ顧ルナレ
畢竟英國ノ府縣稅ハ多年ノ沿革ヲ經テ以テ集成セラル稅法ハ
ハ收稅ノ間實際多少ノ困難ナキニ非ス此ノ法ニヨレバ猶ホ獨
逸ノ等級稅ニ於ケルゴトク下等人民ニシテ家屋ヲ借ル者ハ概テ
貧困且轉移スルコト屢ニシテ稅價ヲ定ムル實ニ難ク常ニ家屋所
有主ヨリ一切之ヲ納メシムルヲ以テ又所有主ハ賃價ヲ貴フレ
テ之ヲ償フナリ

○佛國

佛國ノ府縣稅 敢テ英國ノ如ク全ク直稅ニヨラス凡ク全額四

例ハ毎フランク
 五ガシテハノ稅價
 ナレバ國稅百フラン
 クヲ納ル者ハ府
 縣稅トシテ五フラン
 ノ増稅ヲ納ル
 ノ類

分
 三ハ地稅ヲ以テ之ニ充ツ即チ所謂ル消費物稅ノ如キ其最要
 ナレモノトス是ヲ以テ直稅ハ僅ニ全額四分ノ一ニ充ル事ニシ
 ラ理財上ヨリ之ヲ視レバ固ヨリ消費物稅ノ如ク要位ニ在ラス
 ト雖其稅質ハ則稍々獨逸ノ稅法ニ關スル所アルヲ以テ今特ニ
 之ヲ畧說スベシ

佛國ノ府縣直稅ハ則チ賦加「カンチ」ム名貨ト名ケ國費直稅ノ每
 フラシクニ就テ若干「カンチ」ムヲ賦加スル法ニシテ其取テ
 稅ニ非ス此ノ賦加錢法ハ佛國政命ノ際ニ濫觴シ初メハ國費一
 時ノ窮乏ヲ救ハンガ為ニ施行シタリシガ後遂ニ府縣消費物稅
 フ廣シ之ヲ以テ其代稅ニ供センコトヲ謀レリト虽消費物稅ハ今
 ニ至テ猶ホ依然トシテ府縣稅額ノ要位ヲ占タリ該賦加錢ハ總
 テ四種ノ國費直稅ヨリ之ヲ課納ス即チ「第一」地稅「第二」人頭及家
 屋稅「第三」窓戶稅「第四」職業稅ナリ又賦加錢ヲ三類ニ區分シ常費

錢額外費錢臨時費錢ト稱ス常費錢ハ一フランク「百」カンチ「ム」
 ヲ一「フランク」トス「五」毎ニ五「カンチ」ムノ課收シ平常ノ經費ニ
 充ツルモノニシテ縣法豫メ之ヲ認可スルヲ以テ每度特ニ縣會
 等ノ協議ヲ取ルヲ須ニス但常費錢ハ上ノ「第一」「第二」兩國費稅ニ
 就テ之ヲ賦課ス額外費ハ學校及道路管轄ノ如キ特種ノ費用ニ
 供シ每度縣會ノ認可ヲ經テ賦課スベク且其稅額ヲシテ法制上
 豫メ定ムル所ノ限量ニ超過セシムベカラストス常費錢額外費
 ハ凡ソ政府ヨリ人民ニ要求スル事務ノ費用ニ供スルモノニシ
 テ若シ尚ホ之ヲ以テ不足ヲ生セバ即チ歲入不足賦稅ヲ課セガ
 ルベカラスト故ニ尋常一定ノ費額ハ則チ消費物稅ト常費額外兩
 賦加「カンチ」ムトヲ以テ之ニ充テ非常ノ事項起ルニ會セバ則
 チ臨時賦加「カンチ」ムヲ課收シテ之ニ充ツ但其稅價ハ一「フラ
 ンク」毎ニ二十「カンチ」ムヲ超エベカラストシ若シ該限價ヲ超

過スル所、豫、政府王領ノ許可ヲ得ルヲ要ス
此ノ三賦加錢ノ外府縣ニ屬スル直稅ハ(第一)國費職業稅ノ一部
ヲ分收スルト(第二)諸種ノ玩娛稅即チ畜犬馬及馬車稅(第三)特種
道路稅ヲ收ムルト是レナリ職業稅ハ政府其百分ノ九十二ヲ取
リ餘殘ハ分ヲ以テ縣費ニ充テシム玩娛稅ハ馬稅ト馬車稅トハ
政府之ヲ取り畜犬稅ハ全ク縣費ニ供ス而道路稅ニ至テハ元ト
人畜課稅ニシテ縣内十八歳以上六十歳以下ハ必ス三日間ノ課
役ニ服シ一切ノ車及運用畜^{牛馬}類乗用馬モ亦三日間道路管轄ニ
役マラル、トス蓋此等ノ課役ハ人畜共ニ平均ノ價格ヲ以テ收
贖金ヲ收ムルヲ常トシ其額甚タ洪大ナリ畢竟佛國郡村道ノ整
備ナルハ職トシテ是ノ法ニ由ルナリ
消費物稅ハ消費物ノ申數種ノ有稅品^貨、縣地ヲ運送スルノ
際ニ於テ收入スルモノナリ該稅ハ遠ク四百ニ濫觴シ佛國改命

ノ際不理ノ稅法ナリトシテ一旦廢止セラレタリシガ其後府縣
會計ノ困難ニ際シ再々之ヲ施行シ^{佛國}第一世テボレヲ
時ニ於テ初メテ規則全備ヲナセリ則チ千八百九年五月十七日
ノ布令ニ於テ五種ノ有稅消費物ヲ定メ(第一)飲料物及流動物(第
二)諸食物(第三)諸燃料物(薪) (第四)諸絲料(第五)建築諸材ノ類ニ限リ
消費物稅ヲ收ムベキトナレリ然ルニ千八百十六年四月二十
八日ノ布令中第百四十八條ニ於テ地方消費ニ屬スル物品ハ消
費稅ヲ收ムベシト云フ明文アルヲ以テ是ニ於テカ輿論甚タ疑
惑ヲ生シ即チ新令ニ於テ地方消費物ハ敢テ五種ニ限ラス皆
稅務ヲ帶ニ隨テ千八百九年ノ布令ハ廢止セラレタル歟又ハ此
ノ新令ハ敢テ五種ノ消費物稅ヲ廢スルニ非ス然テ從來ノ如ク
ナレ歟此說紛々久ク定マラザリシガ遂ニ大審院ノ判決ニ於テ
第一說ニ歸セ、故ニ理上ヨリ之ヲ視レバ百般ノ物品如何ノ類

ニヨリテ消費物税ヲ免ルヲ得ル者殆ド稀ナルニ至リ此ノ判決
ヲ以テ注意ヲ明解シ能ハザリシノミナラス却テ消費物類ノ區別
上ニ就テ又新ニ議論ヲ生シタリキ
蓋貨物ノ其府縣内ニ於テ消費セシ地方ニ發賣スル者ハ價
倉規則ノ体裁即チ若干年月ノ間ハ收稅セシ該貨物地方ニ於ル
ヲ以テ石炭ノ諸製造ニ於ケル砂糖ノ銘酒製造ニ於ケル等ノ如
キ諸上乗用ノ原貨モ亦此ノ規則ニ於ルヲ得ベキ乎又ハ純粋ノ
地方消費物ト見做スベキ乎ニ涉リ再々爭議ヲ生テシガ出納案ノ
判決ヲ以テ遂ニ工業ノ不利トナリ既ニ製造ヲ經タル貨物モ亦
消費税ヲ帶ルトナリ是ニ於テ始終無税ノ貨物ハ特ニ官船ニ
用ユル消費物大藥製造用品官用出板用品大砲製鑄木材、医薬果
物ノ中數種其他根類大根、人參、米、桔、棗、柿、荷ニ超一ザル青草等
ノ如キ貧民ノ消費ニ供スルモノニ止リタリキ

消費物税ノ法ヲ制定シ收入方ヲ設ケ或ハ假リニ稅價ヲ定メ及
收稅地方ヲ區分スル等皆其縣ノ權限ニ在リト雖又必ス政府ノ
許可ヲ待テ後施行セザルベカラストス而此ノ許可ハ住民四千
人以上ノ縣ニシテ與テ常例トシ其縣内ニ於テ製造スル物品ハ
他縣ノ製造ニ係ル同品ノ縣内ニ入ル者ト稅價ヲシテ是ニ差違
ナカテシメ且各縣ノ間互ニ保護稅關ヲ置クヲ許サス消費物税
ノ收稅ハ縣廳自ラ之ヲ行フアリ或ハ價付法一箇ノ私人或ハ一
附シ豫定ノ歲額此ノ新法ヲ用タリキニ因ルアリ又ハ若干ノ價
ヲ出シテ之ヲ政府ニ托シ不直稅ト共ニ收入スルアリ

○獨逸

學漏生

學國ニ於テハ更ニ全國一樣ノ府縣稅法ナク皆各縣固有ノ制法
ニ據リ相同シキヲ以テ然レトモ千八百六十六年所謂ル學國戰爭

前ニ在リ既ニ亭領ニ屬セル州ニ於テハ其税法ノ大体ハ則チ元
 ト一定ノ原理ニ基クテ以テ今先ツ初ニ之ヲ説ントス但東方六
 州内ノ府縣ハ更ニ一定ノ府縣税法ナク總テ各地固有ノ税法ニ
 拠ルガ故ニ之ヲ例外ニ置カザルヲ得ザルナリ
 東方六州ノ府縣ハ其レ斯ノ如ク税法ヲ殊ニスト雖但其稅ヲ賦
 課スベキ物類ノコトキハ他ノ府縣ト更ニ毫毛ノ差アルナシ
 何トレバ曩ニ東方諸州ニ令セル所ノ府縣條令中五十三條ハ
 亦他ノ府縣ニ在ラモ之ヲ照準遵奉スベキガ故ナリ
 該條ニ曰ク

凡ソ府縣公有財産ヨリ萃クル所ノ收入不足ニシテ用費ヲ度
 支スル能ハザレバ府縣稅ヲ收ムルヲ得ベシ其收入方法ハ
 第一國稅ニ副テ賦課スルヲ得但此際正ノ規則ニ照準スベ
 シ

王家及公族ヲ除
 ノ外ハ全國ノ人民
 何人ヲ問ハズ苟モ
 賦入アル者ハ皆此
 ノ稅務ヲ帶フ收稅
 ノ義務ヲ負フ事ニ
 振テ等取ヲ分テ
 例ハハ一等ノ賦入
 ラ千四ト見做シ稅
 三十四ラ收メ二等
 ラ千二百四ト見做
 シ稅三十六四ラ收
 ムルノ類

甲 往來工商所々ニ流寓シテ業トスルモノノ稅ニ副課スベカラス

乙 分等歲入稅ニ副課スルニ際シ府縣境外ニ在ル地田園ハ等

外ニ置クベシ

丙 以ノ種類ハ皆政府ノ許可ヲ要ス

イ 賦入稅ニ副課スル際

呂 其他諸般ノ直稅ニ賦課シ而其稅額或ハ此ヨリ萃クル

國稅高ノ半額ニ超ヘ或ハ其稅價國稅ト相異ナルニ際

シ但是レノ稅額ヲ納ムル者ヲ免稅又ハ減稅スル片ハ

敢テ政府ノ許可ヲ要セス

汲 不直稅ニ副課スル際

第二 特ニ直稅及不直稅ニ課スルヲ得但新ニ有稅物ヲ定メ又

稅價ヲ貴フシ或ハ收入方ヲ変スル等ノ際ハ共ニ政府

ノ許可ヲ要ス下ス

賦入税ノ中ニ就テ新ニ有税物ヲ定メ之ニ賦課スル片ハ
ス上(第一)ニ於テ記載セル制限ヲ要シ若シ旧來規定
ノ賦入税ニ賦課スル片ハ新ニ政府ニ請フテ検査ヲ受ケ
許可ヲ求ムニシ
府縣稅收規則及政府ノ許可ヲ經テ府縣ヨリ布告スル
諸則ニ普及スル者ハ十「タ」ルル我ガ七回ユ迄ノ罰金ヲ
課スニシ

是ノ故ニ府縣稅ノ要類ハ(第一)國稅ニ副課スル直稅即チ土地
及家屋稅職業稅等級及藏入稅(第二)國稅ニ副課スル不直稅(第三)
特種直稅(第四)特種不直稅ニシテ(第一)ニ屬スル稅類ハ事態既ニ
明瞭ナレバ今復弁解ヲ要セズ而(第二)國稅ニ賦課スル不直稅ハ
復大藏省ノ指令ニ拠テ稍々取捨スル所ナリ次ノ稅目ヲ廢止セ
ラレタリ即チ(伊)千八百十八年三月二十六日ノ布令ヲ以テ施行

セラレタル諸稅關稅並ニ大根砂糖稅ノ賦課(吾)千八百四十九年
二月八日ノ布令ヲ以テ施行セラレタル燒酒及烟草稅ノ賦課
(波)紙稅ノ賦課(仁)塩稅ノ賦課是レナリ又(第三)特種直稅ニ屬ス
ル者ハ諸種ノ手数料(開市手数料等)ノ如キ凡ソ手数料ノ類ヲ以
テ亦稅中ニ算入スル片ハ(外)即チ特種府縣藏入稅ニシテ其第
一種ハ收入ノ方法全ク國稅收入ノ規則ニ照準スト雖畢竟府縣
ノ全權ニ歸ス其第二種ハ不直藏入稅ニテ納稅者ノ生活上ニ在
テ須要トスベキ費用ノ多寡ニ據テ其藏入ヲ計察シ直ニ費用ノ
多寡ニ應シテ收稅シ敢テ藏入ノ貧富如何ニ関マズ即チ借料稅
借地借家ノ如キ是ノ類ニシテ就中大都府ニ在ラハ好シテ施行
スル所ナリト但此ノ稅ノ如キ固ヨリ藏入稅ノ原理ニ稱ハス寧
ロ消費物稅ニ算入スベキ了更ニ弁解ヲ要マザルニシ
(第四)特種不直稅ハ府縣指令ニ在テハ其範圍稍々廣キガ如シト

雖大藏布達共千八百六十七年七月八日ノ関稅合從約定ニ因テ
實際上ニ制限ヲ受ケタリキ即チ大藏ヨリ諸府縣廳ニ布令セ
ル所ノ者ハ麥酒及蒸麥^{造酒}稅ヲ廢止シ且數種消費物(果物酒炭
薪衣食物^秣)ノ稅價ヲ定メ之ヲ超過スルヲ禁シタリ然リ而該不
直稅ノ制限ヲ致ス最モ甚シキ者ハ関稅合從約定ナリ其第一節
外國產貨物ニ関スル規定ニ曰ク凡ソ外國產貨物ノ合從関稅ニ
係ル類ハ諸政府ヨリハ勿論府縣又ハ諸社會ヨリ複稅ヲ收ムル
ヲ許サス第二節第一條内國及関稅合從諸國製產貨物ノ規定ニ
曰フ凡ソ此等ノ貨物ヲ運搬スルニ際シ各地ニ於テ敢テ收稅ス
ルヲ許サス第七條ニ曰フ府縣消費物稅ハ國稅ニ副ヘテ賦課ス
ルト否トヲ論セス必ス其地ニ在テ直ニ消費スル品類ニ限ルベ
シト而此ノ品類ニ屬スル者ハ麥酒^{蒸麥}及穀肉稅ニ係ル諸品炭
薪諸衣食物^秣等ノ三ナリ燒酒稅ハ亦未收メル地方ニ於テノミ

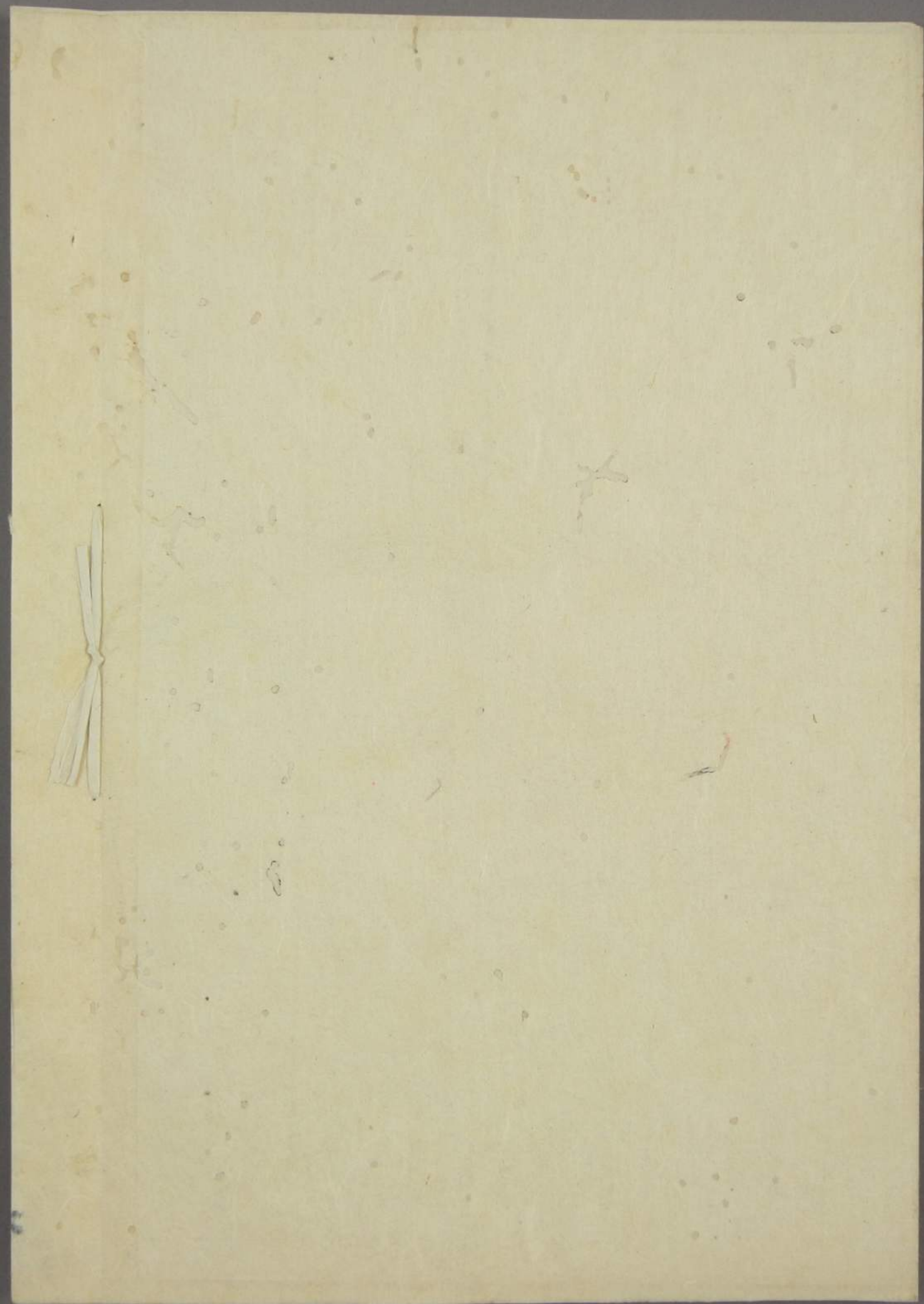
之ヲ許可シ又葡萄酒ノ如キモ葡萄酒生産ノ地方ニハ收稅ヲ許ス
ト雖猶ホ麥酒稅ノコトク稅價ヲシテ國稅定價ニ割ニ超過セシ
ムルヲ許サス
以上說ク所ノ者ハ則チ府縣不直稅ノ範圍ニシテ其大勢ヲ視ル
ベク今又下ニ不直稅ノ元ト各府縣法ニ基カスシテ全國一般ノ
定法ニ據テ收入スル品類ヲ尋ゼントス
此ノ類ニ屬スル者ハ穀肉稅ヲ以テ其最要トス該稅ハ千八百二
十年三月三十日布メテ國稅トシテ百三十二縣ニ於テ之ヲ施行
セシガ翌年ニ至リ改メテ該稅施行ノ縣數ヲ減シタリキ其後千
八百四十八年再ヒ令ヲ下シ穀肉稅ニ代テ直稅ヲ納メント欲ス
ル府縣ハ其望ニ委子シテ許シ千八百五十一年三月一日ノ布
告ヲ以テハ後來猶ホ穀稅ヲ納メント欲スル各府縣ハ收稅現高
未夕諸經費ヲ算ハ三分一ヲ府縣費用ニ充ルコトヲ許シタリキ然
除セザルモノ

リ而此ノ規定ハ千八百七十三年三月二十五日ノ改令ニ拠テ全
ク變革シ穀稅ハ悉ク之ヲ廢止シテ米國稅タリシ肉稅ヲ收メテ
府縣費用ニ充ル丁トナレリ

畧ボ穀肉稅ニ等キ者ハ野獸肉類稅ニシテ千八百四十八年四月
二十四日ノ布令ヲ以テ穀肉稅アル府縣ニ於テ府縣稅トシテ之
ヲ收入スル丁ヲ許サレタリキ但外國ヨリ輸入セル野獸肉類ハ
關稅合從ノ規定ニ關スルヲ以テ收稅スルヲ得ザリシ

此ノ池府縣稅ニ屬スル者ハ畜犬稅ニシテ既ニ千八百三十四年
十月十八日之ガ布令ヲ出シ稅價三タレ^{三四二ノ}ル^{十五}ノ限度ヲ以
テ收入スルヲ得セシメタリ

字國旧領ノ諸州ニ於ケル府縣稅法ハ以上說ク所ヲ以テ既ニ足
レリトスレバ今次ニ千八百六十六年新令^{諸州ニ就テ說ント}
ス



在澳^{アレキサンデル}シールホルト贈付書類ノ内第一号

英佛彙府縣稅

第二号

(地方收稅ニ関スル報告書)





別シユレ
 皆各地固有ノ規則ニ委子更ニ一般ノ制規ナシ但市區ニ
 在テハ其稅則ヲシテ既ニ上ニ掲載セル東方六州府縣規則ノ第
 五十三條ニ於テ定ムル所ノ制限ニ超ヘシムヘカラストシ又村
 區ニ在テハ總テ東方六州ノ村區規則ニ照準スヘシト虽若シ稅
 價ニ關シテ村區定ムル所ノ規定中或ハ不明疑惑ノ件アルキハ
 之ヲ増補改正スヘシトス
 故トノ侯領ナツサウニ於テハ府縣直稅アリ其收入ノ規則及稅
 價等ハ國稅分ノ直稅及消費物稅ノ例ニ同シ但消費物稅ハ關稅
 令從規則及千八百七十三年五月十五日食物稅廢止ノ布令ニ據
 テ勿論制限ヲ受ケタリ
 フランクフルト、アム、マイン、府ハ千八百六十七年三月二十五
 日布令ノ第六十二條ニ據テ東方六州府縣規則ノ五十三條ト同

大正十一年四月
 大隈侯爵郵寄贈

義
 旨

規定ヲ用ユ

故トノ王國ハノールブルニハ更ニ一定ノ府縣稅則ナシ村區ニ於テハ臨時費用ノ如何ニ隨テ稅ヲ課スルヲ常トシ別ニ收稅定規ヲ設ケス市區ニ在テハ概テ地稅工商稅及數種ノ不直稅ヲ收メ

故トノ侯領ヘツセレニ於ケル府縣稅ハ地方ノ慣習法ニ據ルモノニシテ第一種ハ出錢ト稱シ地稅及工商稅ヲ收メ第二種ハ府縣賦課ト稱シ特ニ稅ヲ課シテ定額外ノ費用ニ充テ第三種ハ消費稅ニシテ麥酒燒酒肉果實酒葡萄酒穀粉及其他水風車製造物米麥及其他製菓ノ料ニ用ユヨリ之ヲ收ム石路錢石ヲ疊メル路通路錢及橋錢ノ類ハ舊來ノ慣例アル地又ハ政府ノ特許ヲ得ルニ非レハ收入スルヲ得ス

字國府縣稅ノ大体ハ其レ此ノ如ク既ニ述了ルヲ以テ今茲ニ終

稅義務上ニ就テ畧說スル所アラントス即チ字國ニ於テハ又猶ト他ノ獨逸諸國ニ於ケル如ク一般課稅ノ原理ニ稱ハサル免稅法アリテ兵務ヲ司ル者帝國獨逸及字國政府ノ官員僧侶諸教師等ノ中課稅ヲ免除セラル、アリ而シテ法律上ノ人各種ノ會社論一國ノ公財又ハ諸種ノ寄附金之ヲ以テ學校及寺社等ヲ設クル者ハ則チ其保有スヘキ權限義務ノ主物ナルヲ以テ法律上之ヲ一箇ノ人ハ却テ物成稅及歲入稅ヲ納ムヘシトス但公財公用ト見做ナリハ此ノ例外ニシテ唯物成稅ヲ納ム

其他獨逸諸國

獨逸ノ府縣稅ハ既ニ其首領タル字國ノ制度ヲ掲ケタレハ尔他諸小國ニ至テハ敢テ記載ヲ要セサルヘク且其制度モ畧ホ字ニ異ナル所ナク概テ國稅增課ノ直稅ト消費物稅トヲ以テ府縣稅ニ充テリ唯所謂ル民社賦金ナル者アリテ元ト一種固有ノ稅實ナルヲ以テ今次ニ之ヲ記述セントス民社費用トハ敢テ該縣民

一般ノ利用ニ供スル費用ニ非ス唯縣内若干人民ノ為ニ利ヲ興
シ害ヲ除カンコトヲ目的トスル者ニシテ故ニ該費用ヲ補給スヘ
キ賦金ノ收入モ亦唯之カ利益ヲ被ル者ニ止レリ此ノ如ク若干
人民相共ニ費用ヲ出シテ交互ノ利益ヲ謀レハ勿論民社ニ相違
ナシト虽敢テ之ヲ以テ英國ノ所謂ル民社ト同視セサランコトヲ
要ストス英ノ民社ハ一定ノ権限ト義務トヲ以テ國法ニ基テ
設立シ社中執令ノ人員ハ自ラ之ヲ撰任シ費額ノ大小ハ自ラ之
ヲ議定スレハ畢竟自己行政ノ一部ト謂フヘクモ獨逸ノ民社ハ
則チ縣廳臨時ノ處置ニ成リ議事ノ權ナク執令人員ヲ撰任スル
ナク其權特ニ他方恩給ノ施物ヲ受給シ或ハ之ニ由テ生スル所
ノ費用ヲ課收スルニ止マル者ニシテ竟ニ是レ賦稅收入ノ為ニ
設立セル一稅社ニ過サルナリ。

畢

